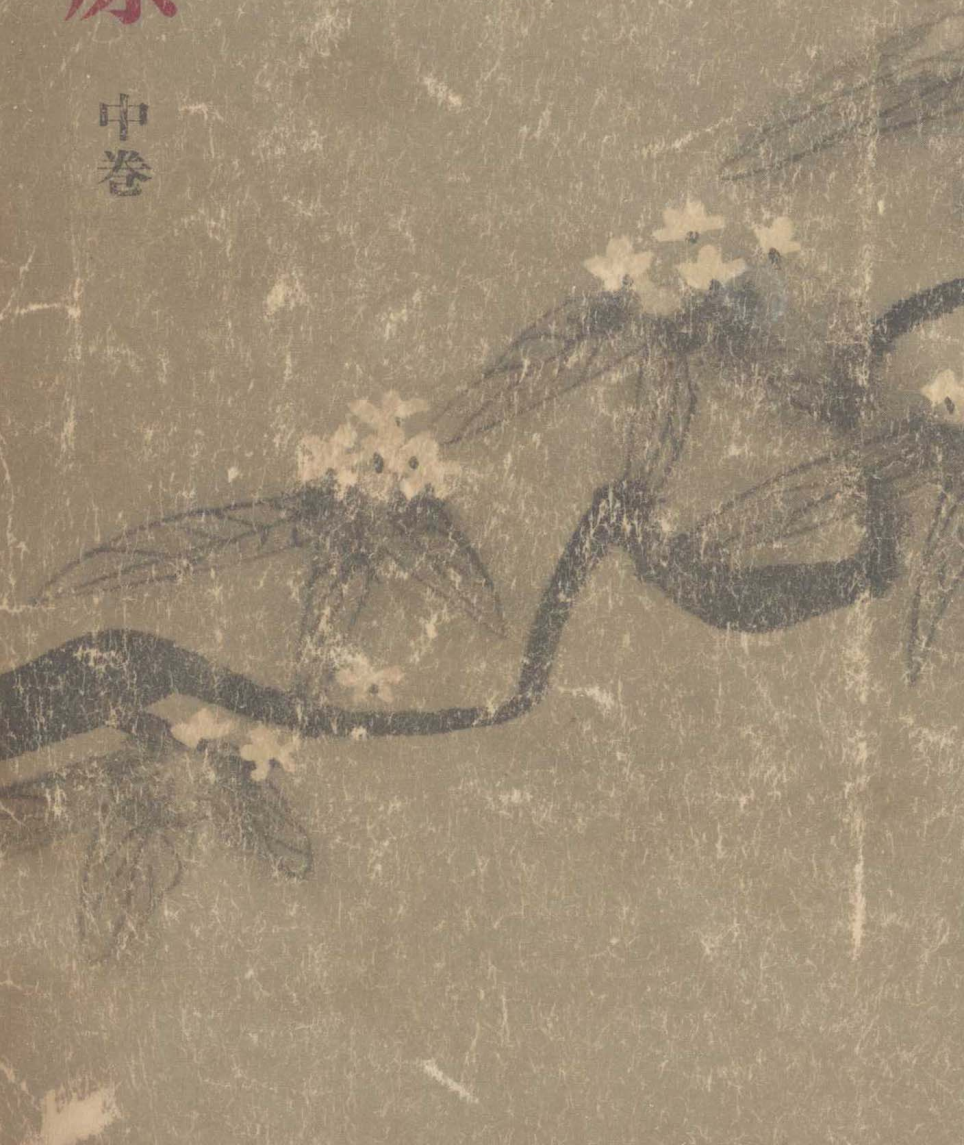


関ヶ原

中卷



司馬遼太郎

関ヶ原

中巻

新潮社



関ヶ原（中）

昭和四十一年十一月五日発行
昭和四十四年十二月十日十四刷

定価四四〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京（三）二〇一二

振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式會社

製本所 植木製本所

落丁本はお取替えいたします

目 次

遁	走	一五九
敦賀の人		一五〇
安国寺恵瓊		一六〇
戦書		一七一
脱出		一八三
細川伽羅奢		一九三
猛炎		二〇四
旗頭		二一五
密使		二三五
島津維新入道		二三三
水口の関所		二四六
金吾		二五五

若狹少將	三六
北上軍	三八
伏見攻め	三九
豊前の人	三九
密使	三九
明日	三〇
福島陣屋	三二
六文銭	三二
抱茗荷	三三
光風	三五
運命	三七
竹伐り	三六

関ヶ原
(中)

装幀
村上
豊

分銅屋

島左近がまだ大坂に潜伏しているとき、佐和山からもう一人の情報収集者がやってきて、大坂に入った。

この情報収集者は武骨者の左近とはちがい、華麗な衣装をまとい、人目をそばたせるような容姿をもっている。初芽であった。

初芽の任務は、三成が任命した。「淀殿の御機嫌うかがいを名目に、大坂へ差しのぼるように」と三成はいった。目的は殿中のうわさをさぐるのである。ゆらい、宮殿にいる婦人とは口さがないものだし、男にはない觀察の角度をもっている。大坂城には位官をもつ女官をふくめて一万八千の婦人がいるから、彼女らのあいたのうわさというのも、当然ながら採集するに足るものであらう。

初芽は、行列を組んで大坂に入った。大坂城本丸に登城し、淀殿付きの女官大藏卿おおくろきやうに会い、旧主への御機嫌奉伺のことばをのべ、あとは世間ばなしをした。

「治部少輔じぶしょうぶどのはご退隠なされたというのに、佐和山城の堀を深くし、塀をあげ、櫓やぐらをきずき、諸国の牢人をあつめているといううわさはまことですか」

と、この中年の貴婦人は、むしろ彼女のほうから三成のうわさをききたがった。べつだん政治的な意図があつての質問ではなく、後世でいえば役者のうわさばなしでもききたがるような心理であらう。役者といえ、三成がまだ太閤の側近にいたころ、かれの人気は女官のあいだでは異

常なほどに高かった。男にはあれほど不人気だったこの往年の辣腕奉行も、女の眼からみればあの狷介さがかえって潔癖という美德として映り、不正に対して許せぬ性格が純情無垢としてうつっていた。それに身ごなしの齒切れよさが一種の性的魅力として感じられるうえに、なによりも三成は加藤清正や福島正則などの荒大名とちがって婦人に親切な男であった。この大蔵卿のような、年増ともいえぬ年齢の婦人からさえ、その噂さばなしをこのまれるわけあいてあろう。

さて、大蔵卿の質問の、城普請や牢人募集についてである。

「存じませぬ」

と、初芽は答えた。

「女てございますもの」

「しかし城に足場が組まれたり、人夫が働いていたりすれば、女てもご普請、とわかるてはないか」

「その程度の普請ならばなさっているようにございます。殿様はなかくの大坂詰めてございましたから、いざお国住まいになると、お城のあちこちにお気に召さぬ点が出てくるのでございませう」

「戦支度ではないのか」

「はい」

「これ、初芽殿」

と、大蔵卿は、声をひそめた。

「わたくしに隠しだてする必要はありません。申しなされ。治部少輔殿は、あの三河うまれの奸人にむかって戦を挑むつもりであらうが」

初芽が当惑してたまっている、大蔵卿は、さらにいった。

「すでに加藤、福島、黒田などの子飼いの大名が腰くだけになつて江戸の老人に這いつくばっている当節、もはや世に俵は^{おと}おらぬと思うていたが、利かん気て売った治部少輔殿だけはべつじやと思うておった。いやいまも思っている。その治部少輔殿が、退隠とみせかけて単身佐和山にもどり、陸濠を深くし城壘をかきあげ、ひろく豪俠の士をあつめておるときき、さてこそは、と殿中、歓声をあげんばかりのよろこびであつた。これ初芽、その話をしてくだされ。話をきかせてわれらをよろこばせてはくださるまいか」

「たとえ」

初芽はいった。

「戦備をおととのえなさるとしても、初芽の口から大蔵卿様ともあろうお方に申しあげることにはできません。お察しくくださるほか、ございませぬ」

「あいなあ」

大蔵卿は、その答えて満足し、「そのかわり、家康方の動きは知りうるかぎり、お教え申そうぞ。いやいや、差し出たことながら、今後、ゆゆしき事があれば、こちらから密使を佐和山へ走らせてお教え申そう」

「なにぶんとも」

初芽はつい、本音を吐いた。

大蔵卿の語るところでは、本丸の御殿に詰めている武士、女官、茶道たちの家康に対する怒りと憎しみは、異常なほどであるらしい。

なにしろ、西ノ丸の家康の権勢は非常なもので、事実上の大坂城主としてふるまい、諸侯をあ

ごで勢しらいはじめている。

「人の心はあてにならぬ」

諸侯も諸侯だ、と大藏卿という。諸侯はそれぞれ家康の家来から詰問つめまをもらい、機嫌奉伺に登城してきては用もないのにそれぞれの詰問に詰めている。所定の間に詰めるなどは、家康をもつてすでに天下人として遇している証拠であつた。しかもかれらは、おなじ大坂城に登城しても、本丸には来ず、ほとんどが西ノ丸にのみ出入りしていた。秀吉が死んでまだ一年の月日もたたぬのに、世間とはすてにこうである。

「かようなことは、それを申しては口の汚けがれになるゆえ申したくはないが、あの衆たちは吝嗇りんしやくての」

大藏卿の觀察はこまかい。あの衆、というのは家康とその幕僚の三河衆のことである。かれらはこの西ノ丸駐屯の費用のほとんどは豊臣家の財政からまかなわせているという。

「うそ」

初芽は笑いだした。いかに吝嗇りんしやくといっても世にそんな話はない。ゆらい、大名は戦時平時を問わずすべて自前で身動きするもので、たとえば大坂屋敷に居住する費用いっさいは大名負担である。家康のみがその例外であるはずかない。大坂城とその城内にあるすべての金品は豊臣家の財産で、家康が私用すべきものではない。

「いや、本当です」

「本当とすれば」

盗賊ではないか。豊臣家の居城に勝手に入りこんできて、自分も豊臣家の米を食ひ、連れてきた何千という自分の家来どもにも、城の米蔵の米を食へさせている。どういう神経であらう、と

思うと、初芽は顔が蒼ざめるほどの怒りをおぼえた。

「島左近が大坂にきているらしい」

という情報を得た本多正信は、自分の家来のなかから手利きの者二十人をえらんで探索を命じた。

「見つけ次第に斬れ」

と、正信はいった。ほどなくその動静がくわしくわかった。左近は单身潜入し愛宕町の宿にとまり、ほとんど連日堺や大坂の妓楼であそび、そこで人に会ったり、ひとの屋敷を訪ねたりしているという。

（大胆な）

とおもったが、しかし正信にとっては願ってもない。戦場なら一万の軍を駆けひきさせても討ちとりたい島左近か、供も連れずにこの街のどこかにいるのである。

（是が非でも殺してしまわねばならぬ）

左近を殺すことは、佐和山の石田軍団の軍事的威力を半減させるのにひとしい。

翌日の夕、正信は家康によばれた。

「左近を秘かに討ちますぞ」

と正信は家康にうちあけようと思ったが、それよりさきに家康のほうから、意外な話題を出した。

あたらしい佐和山情報である。

「柴田弥五左衛門が、佐和山から帰ってきてた。だいま万千代（井伊直政）のもとに復命した」と家康はいった。

じつは五日ばかり前、家康と正信が相談のすえ、三成がどんな肚で退隠生活を送っているか、ひとつさぐってみよう、と思い、一策を講じたのである。一策とは、適当な使者をえらんで三成のもとにやらせ、

「前田利長、金沢城にて謀反の企てを進めつつあり、いずれこれを討たねばならぬが、もし前田・徳川の手切れのせつはよろしく徳川のほうに御加勢たのむ」

ということをし、ぬけぬけと三成に言わせてみようと思ったのである。

「どういふ返答をするか」
それによって、三成の肚のなかが多少ともわかるであらう。

「おもしろい」

ということできつそく、中立的な存在である豊臣家馬廻役柴田弥五左衛門という者を選んでさしむけた。その報告が、井伊直政のもとに入ったのである。

「弥五左が、どう申しております」

「それがさ。治部少は弥五左を歓待し、お使者ご苦勞でござる、とわざわざ国光の脇差などをあたえたのち、徳川・前田手切れのせつはよろこんで徳川殿に付き申そう、とさわやかに申したいうぞ」

「さわやかに」

正信はその言葉を味わっている。これほどの重大事を、年来反徳川の態度をとりつづけている三成が、そうと聞くや、ああよろしゅうござるとも、御加担いたそう、と二つ返事で承諾すると

いうのがそもそもあやしい。

「狐でござるな」

正信はいった。家康と正信のあいだの隠語では三成のことを、

——佐和山の狐。

というふうと呼んでいる。相手はきつね、当方はたぬき、いずれにせよその化かし合いに秘術をつくしていることにはまちがいない。

「この返事、どう思う」

「いよいよ佐和山の狐は、上様との合戦に踏み切ることには心をきめましたな。その準備の時間をかせぐために、いまは上様に従順なる顔を作り、当方がどんな無理難題を吹っかけようとも、あ左様でござるか、いかにも仰せに従いつかまつるであらう、という態度をとっているらしい。

これにて治部少謀反をおこすこと、火をみるよりも瞭かてござりまする」

「弥八郎（正信）、そのほうもそうおもうか」

「上様も？」

「ああ、わしも同じことを思った。狐にしては子供っぽい化け方をする男だ」

「まだ若狐でござるによつてな。とてもとても上様にはかいませんまい」

「まして弥八郎にはかなわぬ」

君臣、相瞻て笑いだした。要するに、この二人は三成の挙兵そのものには驚かぬ。むしろ三成が挙兵することを望み、それによつて天下を乗とつてしまおうとおもっているのである。だから佐和山の狐から「謀反」のにおいを嗅ぎだすことが、家康の野望にとっては大朗報なのである。

「弥八郎、三成はかならず立つか」

「まぎれもござりませぬな。いまひとつ、手許に証拠をにぎっておりますが」

「どんな？」

「島左近が、大胆にも越後の郷土ごうどというふれこみて単身大坂に参り、諸家の肚の中、動きをさぐっております。かれは石田家にとりましては至宝といわれた軍師、その軍師みずから危険をかえりみずに大坂へ潜入しましたのは、よほどの秘謀があつてのこととござりましょう」

「秘謀とは挙兵じゃな」

「もちろんのこと」

「しかし、いつ事をおこすか。今年の暮か、それとも来年になるか」

「上杉が」

徳川家ではそのことも偵知している。

「呼応して立つとすれば、上杉家は会津にちゅうぶ入部してまだ数年にもならぬため、まだまだ戦備に半年はかかると見なければなりません。されば挙兵は来年の晩春か、夏」

「待ちどおしいのう」

家康は、指の爪を噛みながらいった。とはいって見たものの、家康の胸中は半ばよろこび、半ば戦いくさっている。三成の諸侯工作の仕方によつては家康は来年の晩春か夏、地獄にはたき落されねばならないのである。

それから数日、初芽は城内の大蔵庫の屋敷に逗留していたが、ある日、市中にいる左近から使つかいがきたので愛宕町のかれの旅館まで出かけてみた。